
御徒町樹里の冒険 最後の敵(前編)

神村律子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

御徒町樹里の冒険 最後の敵（前編）

【Nコード】

N2049J

【作者名】

神村律子

【あらすじ】

僕は勇者。とうとう、悪魔コツリにいる玉座の間まで辿り着いた。

僕は勇者。

長い旅の末、僕達の本当の敵の正体がわかった。

それは、悪魔コツリ。

全部こいつが仕組んでいたのだ。

もしかすると、カオリンが性格が悪いのも、リクが大飯食らいなもの、あいつのせいかも知れない。

悪魔コツリは、神に戦いを挑んだほどの実力の持ち主。

敗れたとは言え、僕達が勝てる相手とは思えない。

確かに、そのコツリの娘であるコンラと樹里ちゃんが味方にいるが、恐らくコツリはそれ以上の力を持っているはず。

どんな方法で挑めばいいのか？　僕は考え込んだ。

「母コツリは、お姉ちゃんと私の力を合わせ持ちます。戦いは厳しいものになるでしょう」

樹里ちゃんが言った。皆、その言葉に沈黙する。

「あんな女を母などと呼ぶでない、樹里。あれは悪魔。そして、我らが父ジーフの仇ぞ」

コンラが初めて口を挟んだ。

「お姉ちゃん……」

そんな姉を悲しそうに見つめる樹里ちゃん。やっぱり可愛い。

僕は断然樹里ちゃんだ。コンラに心変わりしているリクは最低な奴だ。

「ジーフの仇ってどういう事ですか？」

カオリンが尋ねた。樹里ちゃんがカオリンを見て、

「父ジーフは、私を助けるために、たった一人でコツリの軍隊に挑んだのです」

「……」

悪魔が差し向けた軍隊とは、どんなものなのだろうか？

「軍の総司令官が、父との一騎打ちを申し出て、父はそれを受けました。でも、総司令官が危うくなった途端に、全員が父を攻撃して、父は死にました」

何て卑怯な……。作者なら、あいや、コツリの軍隊ならやりかねない。

「私は一人で追手を逃れ、マングー王国に辿り着きました」

「えっ？」

僕は意外な国名を聞いて驚いた。マンガー王国とは、僕の生まれ故郷なのだ。

ますます樹里ちゃんに親近感が湧く。

「そして、身を潜めて生きて来たのです」

意味ありげに僕を見る樹里ちゃん。何だろう？

「コツリの魔法攻撃は、私と姉で防ぎますから、後は皆さんでダイレクトアタックをかけて下さい。悪魔とは言っても、コツリも不死身ではありません」

一同は頷いた。

「しかし、コンラ様はまだお身体の具合が優れない。私が代わりに……」

カジューが異義を唱えた。

「カジュー、私なら大丈夫だ。気遣い無用」

コンラは弱々しく微笑んで言った。するとカジューは、

「ならば、私はコンラ様と共に戦いましょう。コツリに騙されていたとは言え、私は大罪を犯した。その罪滅ぼしのために、この命を賭けます」

「ありがとう、カジュー」

コンラは嬉しそうに言った。

そんな二人のやり取りを、恨めしそうに見ているカオリン姉妹。

姉妹だけに、その「ジト目」はもう「おしまい」にすればいいのに……。

あああ、座布団は一枚残して下さい。○田君！

作戦が具体的に決まった。

コンラ・樹里ちゃんの最強姉妹が、コツリの魔法を全部封じる。

そして、カオリン。ユカリンの最恐姉妹が、コツリにダイレクトアタック。

その後方支援を怪力娘のユーマが担当。

リクとノーナは、その絶妙のコンビネーションでコツリの兵達を攪乱。

さらに止めを刺すために、僕が最後方から溜め技の秘奥義である「勇者の攻撃（仮）」をかける。

勝てるかも……。

そんな気がして来た。

「この先にある玉座の間に、コツリが封じられた石碑があります。早くしないと、完全にコツリが甦ってしまいます」

樹里ちゃんの言葉に僕は、

「でも、魔力の供給は止めたんだろう？」

「止めたのですが、まだ他にもルートがあつたようで、また吸収を始めています」

「何だつて？」

僕達は顔を見合わせた。

「よし、急ごう」

「おーっ！」

今まで戦った相手とも力を合わせる。これこそ、この旅の醍醐味だ。

これこそ、勇者の人徳だ……。

言つて虚しくなった。

「樹里ちゃん」

僕は気になって樹里ちゃんに声をかけた。

「はい、勇者様」

「いいのか？　いくら敵でも、そして悪魔だとしても、相手は君達の母親なんだよ」

その問いは、樹里ちゃんの心を揺さぶるものかも知れない。でも、尋ねずにはいらなかった。

「はい。勇者様と旅を始めた時から、その覚悟はできていました。大丈夫です」

「そうか。それなら、行こう」

「はい、勇者様」

僕は決意した。

何があっても、この戦いに勝つ。

そして、どんな事をして、樹里ちゃんを守ると。

長い回廊を進んだ先に、玉座の間があった。

部屋の反対側に、魔王の椅子がある。かつてコンラが使っていたもののだろうか？

「ここに再び足を踏み入れる事になろうとはな」

コンラは苦笑いをして言った。

「来たか、愚か者共」

ひーっ。何だ、今の不気味な声は？ 地獄の底から聞こえて来たような、魂も凍るような声だ。

「悪魔コツリ、僕は勇者だ。お前を倒しに来た。覚悟しろ」

僕はガクガクと震えながら言った。

「ワハハハ、そんな及び腰の勇者が、この私を倒すだと？ 笑止千万。返り討ちにしてくれるわ！」

コンラの椅子が崩れ、その向こうから石碑が現れた。

「いかん、もうコツリは甦りかけているぞ」

コンラが言った。皆に緊張が走る。

「お姉ちゃん、魔導士さん！」

樹里ちゃんがコンラとカジューに目配せして、走った。

「妹が姉に指図致すな、樹里！」

コンラも走り出す。

「私はカジューですよ、いい加減覚えて下さい、樹里様！」

カジューも走った。

「コンラとは気が合いそうですわ」

カオリンが呟くと、

「私は樹里様と気が合いそうですわ」

とユカリンが言い返す。カオリンはムッとしてユカリンを見ると、

「私達も行きますわよ、ユカリン」

「はい、カオリン」

二人も走る。

「ああっ！」

気がつくと僕達はすっかりコツリの兵に囲まれていた。

「ノーナちゃん、オラ達も行くべー」

「はい、リクさん」

リクとノーナは兵達に向かった。

「私の怪力、見せてあげるわよん」

ユーマがカオリン達の援護に走る。

「よし！」

僕は一番後ろ（別名一番安全な場所）で、気を溜めた。

勇者の最大の攻撃。気と共に繰り出す、大上段からの斬撃。

名づけて「勇者の攻撃（仮）」。結局名前が思いつかない……。

「揃いも揃って、大バカ者共よ！」

石碑に亀裂が走った。

「何！？」

コンラが仰天する。樹里ちゃんもあつと叫んで立ち止まった。

「何と！」

カジューも眉間に皺を寄せた。

「コツリが甦るぞ」

コンラが叫んだ。

「くっ！」

カオリンとユカリンも突進を止めた。

「ふおおおおっ！」

背筋が凍るようなおぞましい声と共に、石碑が粉微塵になり、悪

魔コツリが甦った。

僕はその姿を見て啞然とした。

一言で言えば、酒樽みたいな体型のガマガエル。

キモッ！ こんな醜い奴から、どうしてコンラと樹里ちゃんのような美人姉妹が生まれるのさ！？

納得がいかない。

「そこ、笑うな！」

コツリはその短い腕を精一杯伸ばして、腹を抱えて爆笑しているカオリンとユカリンを指差した。

「こ、これが笑わずにいられますか、ねえ、ユカリン？」

「そ、そうですね。いくら敵役とはいえ、面白過ぎて困りますわ」

二人共、笑い過ぎだ。ここは敵地なんだぞ。

とは言え、僕も笑いを堪えていたが。

「おのれーっ！ 私を愚弄する者は許さぬーっ！」

コツリが魔法攻撃を始めた。どこから降り注ぐか予測ができない雷撃の連続技だ。

しかし、アホな攻撃だ。自分の兵達が、次々に倒れている。

「これは私が！」

カジューが杖を振るった。

「テラライトニング
最弩級雷撃！」

カジューの魔法がコツリの雷撃を全て受け止める。

「次はどうだ！」

今度は床のあらゆるところから、炎の柱が出現した。またやられるコツリの兵達。

何か哀れだ。

「コールドテスト
最冷凍！」

樹里ちゃんが冷凍呪文で火柱を凍らせた。

「まだまだよ！」

さらに大津波が出現した。コツリの兵達はなす術なく、津波に飲まれた。

「スーパーリヴァイアサン
超海竜爆渦！」

コンラが呪文を詠唱した。巨大な海竜が津波をその巨体で受け止めた。

「ぬうつつ……。お前達、よくもこの私に……」

ガマガエルはまるで四六の蝦蟇がまのように脂汗しじくを流した。

こいつの正体はやっぱり蛙か？

「私を助けて、貴方！」

ガマガエルは、裏声を使って叫んだ。貴方？ 小坂。子でも出て来るのか？

「まさか……」

樹里ちゃんとコンラが顔を見合わせた。

「呼んだかい、愛しい人よ」

ガマガエルの後ろに、一人の男が現れた。すっげえイケメンだ。

誰だ？ あの格好は、神官？ いや、違う、賢者だ。

まさか……？

「父上……」

コンラが呟いた。樹里ちゃんは啞然としている。

父上？ 賢者ジーフなのか？ そんな、ジーフが、コツリの味方？

何て事だ！

僕達は一気にピンチに陥った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2049j/>

御徒町樹里の冒険 最後の敵(前編)

2011年1月8日22時06分発行